

100年 先を読む

19

休眠資産を 市場に回帰させることで 出現するビジネス

▶ 生物世界とは異質な人間社会

バイオミミクリという研究分野が注目されている。バイオは生物、ミミクリは模倣で、生物の能力を真似した製品を開発する研究である。

3種の模倣があり、第1は形状を真似する段階で、ほとんど抵抗なく水中に突入するカワセミのクチバシの形状を高速列車の先頭車両に採用するなど、実用になっている。

第2は機能の模倣で、サメが高速で遊泳できる原因は皮膚の表面の鯨肌にあることが判明し、それを模倣した布地の水着で水泳したら高速になったなどの事例がある。

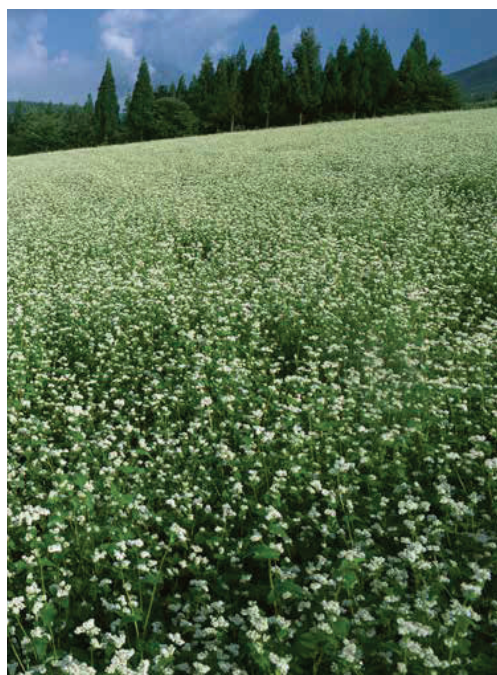
第3は生物世界の構造を参考にする分野で、1例はアグロフォレストリーである。自然の生物環境には多様な生物が共存し、樹木の枝葉は動物の食料となり、動物の糞尿は植物の栄養になるように、相互に密接な関係を維持している。人工の農業は森林を開墾して原野にして作物や家畜を生産するが、用水や肥料が必要であり、農業さえ散布する。その結果、前者には無用な存在はないが、後者にはさまざまな廃棄物質が発生する。そこで自然環境の一部として人間に有用な作物を栽培しようというのがアグロフォレストリーである。

このように生物環境には不要な物質は存在しないが、人間社会では不要な物質が大量に排出され、それが全体の環境を劣化させている。最近の事例は海洋プラスチック汚染である。現在、世界では年間4億トンのプラスチックが使用されているが、その一部は不法投棄などによって河川から

海洋に流出する。海中に浮遊する総量は現状で3億トンと推定されているが、30年後には11億トンになり、海中の魚類の重量の合計に匹敵するという驚嘆するような予測さえある。

▶ 人間社会に発生する膨大な無駄

人間社会は天然資源を地球から採集して製品に変化させて流通させるが、使用されなかった製品や使用した残滓は不要物質として社会に堆積されていく。生産、流通、消費の段階で廃棄されてい



る食料のうち、食用になるのに廃棄されている部分を食品ロスというが、日本では8000万トン供給されている食料のうち2760万トンが廃棄され、そのうち食品ロスになっている部分は640万トンになる。国連が食料不足の国々に援助している食料は320万トンである。

食料以外の物品についても、使用されなまま日本の家庭の押入れや物置に保管されている不要な品物の価値を試算した結果がある。総額で37兆円であり、世帯あたりでは70万円、大人2人と子供1人の家庭では60万円になる。これは平均年収の13%になるが、20%以上になる休眠資産を蓄積している裕福な人々も17%存在する。これらは価値を発生しないだけでなく、休眠資産を保管する空間を必要とするから、無用な家賃を負担しているという損失にもなる。

▶ 休眠資産の活用が 人間社会を変貌させる

これらの不要物資を有効利用することは社会にとって重要である。食品ロスについては世界各国でフードバンクが登場している。スーパーマーケ

ットなどが包装の破損などで商品としては販売できないが、賞味期限以内の食品をフードバンクに無償で送付すると、そこから食料を必要とする家庭や個人に配給する仕組みである。1960年代のアメリカに登場し、やがてヨーロッパに波及したが、21世紀になって日本にも伝播し、現在では80以上の組織が各地で活動している。

これまで家庭の休眠資産は書籍であれば「ブックオフ」、雑貨であれば休日に公園などで開催される「フリーマーケット」で処分する程度であったが、情報技術が「フリマアプリ」という新規の解決方法を実現させた結果、巨大ビジネスに変貌してきた。代表は各人が電子フリーマーケットに休眠資産を出品して売買取る「メルカリ」で、2013年の開業から5年で上場し、それまでの累計の販売総額は1兆円を突破している。

これら物品の休眠資産だけではなく、「エアビーアンドビー」は利用していない住居という休眠資産を宿泊施設に変化させ、「Uber」は休眠労力を輸送事業に活用している。日本の休眠預金は7000億円にもなっているが、活用方法を発明できれば膨大な投資資金が誕生する。ヒト、モノ、カネの休眠資産の活用は企業にとって新規の経営資源になりえるが、それ以上に重要なことは、無駄の大海に浮遊する人間社会が無駄のない生物世界に接近できることである。



東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男
Tsukio Yoshio

昭和17(1942)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカーネーとクロスカンTRIESキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に「幸福実感社会への転進」(モラロジー研究所)、「転換日本」(東京大学出版会)ほか多数。